

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

古典を読もう

山岡洋一

- 『国富論』の新訳を考える理由

昔に戻り基本に戻る方法で行き詰まりから抜け出せることが多いのだから、経済がどこかおかしくなっているように思える現在、経済学の基礎を築いたといわれ、古典中の古典と呼ばれている『国富論』を読んでもみようとするのはごく自然である。

誰も教えてくれなかった英語（第7回）

柴田耕太郎

- みんな英語ができない

英文和訳の段階では英文を読めたことにはならない。自然な日本語、意味の通る日本語にできて初めて英文が正しく読めたと言える。

私的ミステリ通信（第4回）

仁木めぐみ

- エリザベス・ジョージ

本格ミステリ界の新女王、ドロシー・セイヤーズ、P・D・ジェイムズの系譜を継ぐといわれるエリザベス・ジョージを紹介する。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

『国富論』の新訳を考える理由

経済学部志願者の数が増えているという話を聞いた。入試がやさしいからだろうという自嘲ぎみの話だったが、そんなわけがないと思う。米国では1930年代に経済学部がまともな学部として認知されるようになり、志願者が増えたという。理由は考えるまでもない。日本でいま、経済学を学びたいという若者が増えているとしても、何の不思議もないはずだ。

何かがおかしい、たぶん経済にその根があるのだろうという感覚は、たぶん誰でももっている。だから経済に興味をもつ人が増えているはずだし、経済学を学んでみようと思う人も増えているはずだ。経済書の読者も増えているはずである。少なくとも潜在的には。

何かがおかしい、先が読めない、足元がぐらついているようだ。いまほどそうした感覚が強い時期はそうそうあるものではないと思う。何とか現状を理解し、突破口を見つけたい。そう考えるのが当然である。ではどうすればいいのか。

過去に同じように壁にぶつかった時期のことを考えてみると、基本に戻る動き、昔に戻る動きが突破口になって、前進できるようになる例が多いことに気づかされる。復古の動きが前進をもたらすのだ。古くは明治維新がそうだし、ルネサンスや宗教改革などもそうだ。もっと最近にも、1970年代にアメリカやイギリスがインフレと不況に苦しんでいたとき、突破口になったのは19世紀の経済学、いわゆる古典派経済学に戻る動きであった。こうして登場した新古典派が、現在でも経済学の主流になっている。

昔に戻り基本に戻る方法で行き詰まりから抜け出せることが多いのだから、経済がどこかおかしくなっているように思える現在、経済学の基礎を築いたといわれ、古典中の古典と呼ばれている『国富論』を読みみようとするのはごく自然である。200年以上も昔に書かれた本をいま読むことはないだろうと思えるかもしれないが、古典に戻る方法が遠道のようにみえて、じつはいちばんの近道なのではないかと思う。

古典のつねとして、誰でも名前は知っているが、ほとんどの人が読んだことがないのが『国富論』だともいえる。たぶん、『国富論』と聞くと、自由放任、神

の見えざる手、市場原理などの言葉がすぐに頭に浮かんでくるはずだ。だが、これらはある意味で、上述の新古典派の解釈を一般向けのスローガンに仕立て上げた結果である。実際に『国富論』を読めば、印象がまったく違うことに驚く人が多いはずだ。

翻訳者という立場上、ここで『国富論』をどう読むべきか講釈をたれようとは思わない。だが、ふたつの点だけを指摘しておきたい。第1に、『国富論』を読むと、ものごとをどう考えていくべきか、ヒントが得られる。第2に、『国富論』は経済学の専門家向けではなく、一般読者向けに書かれたものなので、経済学の知識がなくても楽しく読める。

ものごとをどう考えるのか

意外に思われるだろうが、アダム・スミスは『国富論』で *economy* という言葉を使っていない。いやたしかに使っているという人もいるだろうが、それはスペルを現代式に修正した版で読んでいるからだ。スミス自身は *oeconomy* と書いている。「経済」ではなく「経済」と書かれているようなものではないかと思われるかもしれないが、そうではない。スペルが違うだけでなく、意味も違う。たいていは、語源とされる *oikonomia* や *oikonomos* に近い「家計」「儉約、節約」の意味で使われている。第4編を中心に *political oeconomy* が何度か使われていて、この場合だけは明治の翻訳家が「経済」という訳語を作る際の語源になった「経世済民」に近い意味になる。

この本の性格を知りたいければ、*oeconomy* がどのような頻度で使われているかもみてみるべきだろう。1000ページ近い経済書なのだから、数千回使われていても不思議ではないはずだ。だが調べたかぎりでは、約38万語の『国富論』全文で、*oeconomy* は31回しか使われていない。うち *political oeconomy* が18回である。1000ページ近くで31回、総語数に対する比率でみると0.008%、約12,000語に1語の割合である。だから意外や意外、アダム・スミスは「経済」について論じているわけではないとも言えるのだ(ちなみに、「神の見えざる手」は一度しか使われていないし、「自由放任」はたぶん一度も使われていない。「市場原理」もでてこないし、*market* なら数えきれないほど使われているが、たいていは抽象的な「しじょう」よ

りも具体的な「いちば」に近い意味で使われている)。

では、何について論じているのか。翻訳という仕事をしており、物書きの端くれともいえるので、たとえばこういう記述が印象的だ。スミスによれば、文人や物書きはたいてい、公費で教育を受けたのに何らかの理由で聖職につけなかった人で、人数が多いのでみな貧乏であり、印刷技術の発明で本を書く仕事ができる以前には、乞食とほとんど変わらなかったというのだ。

これにかぎらず、『国富論』には世の中の現実についての記述がきわめて多い。たとえばこの物書きの話は第1編第10章にでてくるが、この章は職業総覧といえるほど、各種の職業についてくわしく取り上げている。こうした話がどの章にも大量にでてくるので、アダム・スミスの関心は経済学にも経済にもなく、「世の中」にあったのではないかと思えてくる。世の中の現実から出発し、いまの言葉でいえば「経済」を切り口に、世の中の仕組みを解きあかそうとしたのが『国富論』ではないかと思えるのだ。

アダム・スミスが取り上げている現実はもちろん、18世紀後半までの世の中の現実だから、いまの日本の読者にとってかならずしもピンとくるものばかりではない。上述の物書きの話でいえば、「聖職」という言葉がそうだ。だが、この言葉を「定職」と読みかえれば、たったいまの現実を語っているように思えて、思わず苦笑するのではないだろうか。

スミスが関心をもったのが「世の中」の現実だといっても、『国富論』はいうまでもなく、現実を紹介しただけの本ではない。現実を現実としてみていっても、世の中の仕組みは分からない。だから、現実から出発して抽象的な理論を精緻に組み立てて、世の中の仕組みを解きあかしていく。そして、それ以前にあった考え方、とくに金が大切だとする考え方を根底から批判する。だからこそ、『国富論』は古典中の古典と呼ばれているのだ。

この本に描かれた現実を自分の身の回りにある現実にあてはめて考えていき、抽象的な理論がどのように組み立てられ、応用されているかをみていけば、ものごとを考えるとはこういうことなのかと感動するはずだ。ものごとの考え方を学ぶ、これがたぶん古典を読む最大の理由だろう。古典を読んでいれば、さまざまな論者がいまの経済について論じているのを読んだとき、本物と偽物を見分ける目が養われるはずだ。

はったりもこけおどしもない

そしてありがたいことに、『国富論』は経済学の専門家に向けて書かれたわけではない。世の中の現実に関心もち、世の中の仕組みを知りたいと考える読者向けに書かれているのだ。経済学は『国富論』からはじまったといわれているのだから、ある意味ではこれは当然でもある。『国富論』以前にも経済について論じた本はあるが、経済学が専門分野として確立していたわけではない。だから、経済学の専門家という読者層はなかった。

といっても、『国富論』が簡単に読めるとか、やさしくて分かりやすいとかいいたいわけでない。世の中の現実から出発して、世の中の仕組みを明らかにするために抽象的な理論を精緻に組み立てているのだから、やさしくて分かりやすいはずがない。スミスが「忍耐強く、注意深く読むよう」読者に求めているほどだ。それに、原文で1000ページ近く、訳書では文庫本で3~5冊にもなるほど長い。だが、長くて難しいのは、世の中の仕組みが簡単には理解できないほど難しいからだ。

本を読んで難しいと感じるとき、たいていは難しく書いてあるから難しいのである。つまり、一般の読者には理解できない専門用語を使い、もっと簡単に説明できることをわざわざ複雑に書いてある。はったり、こけおどし、目くらまし。これらを駆使しているから難しいのだ。

だが、スミスはそういう方法をとらない。何のけれどもなく、ごく普通の言葉を使って、ごく普通に書く。書くというより、説明するという印象すら受ける。原文を読むと、スミスが目の前にいて、とくに専門知識があるわけではない聴衆に向けて、世の中の仕組みを丁寧に説明してくれているように感じる。スミスは書いたのではなく、講義をしたのだと思えてくる。だから、難しい本なのに楽しく読める。

既訳はいくつもあるが

これほどの本だから、もちろん、既訳は何種類もある。古くは明治時代に出版された石川暎作訳『富国論』があるようだが、まだ入手できていない。大正以降に出版された竹内謙二訳をはじめ、ごく最近に出版された水田洋・杉山忠平訳まで、8種類の訳は入手できた。これらの既訳については、これまでに何度も取り上げてきたので、ここで改めて論じようとは思わない。だが、いくつかの要点だけには触れておきたい。

どの分野のものでも、古典の翻訳は積み重ねによって成り立っている。つまり、先人の翻訳を学び、その良い点を取り入れ、悪い点を改良して新しい訳が生まれる。したがって、普通ならもっとも新しい訳がもっともすぐれていると考えてまず間違いはないはずである。

そこで、『国富論』を読むのなら、2000年に出版された最新の水田洋・杉山忠平訳（岩波文庫）を読もうと考えるのが普通だろう。ほぼ四半世紀ぶりの新訳なので、それ以前の訳にあった問題点を解決した決定版になっていると期待するのが当然だからだ。だが、そう思って水田・杉山訳を読んで失望した。既訳の問題点を解決するどころか、何倍にも濃縮したような訳だと思えたからだ。

おそらく最大の問題は、ごく普通の言葉を使って、ごく普通に書かれている『国富論』を、専門分野の翻訳に使われる一対一対応型の方法で訳したことだろう。スミスは一語を一義に用いてはいないし、一義を一語で表現してもいない。ごく普通の英文でみられるように、一語をいくつもの意味で使い、一義をいくつもの語で言い換えていく方法をとっている。これを一語一義、一義一語の原則を想定して訳していくと、英文和訳の回答のような文章ができあがる。読者には意味が伝わらなくなる。

要するに、『国富論』の翻訳では積み重ねで質が高まるどころか、逆に低下してきたようなのだ。ではどうすればいいのか。こういう問題にぶつかったときは、基本に戻り、昔に戻るのがいちばんだ。そこで既訳を調べていくと、昭和2年発行の氣賀勘重訳『國富論上巻』が素晴らしい訳であることに気づく。氣賀訳については『翻訳通信』2003年6月号で詳しく紹介した。何よりも「原文の意義を可及的明瞭に邦人に傳へんとする」姿勢が名訳を生み出す原動力になっていると思う。ただし、旧字旧仮名の文語体で訳されていて、簡単に読める本ではない。

翻訳の歴史が長い本、たとえば『聖書』がどのように訳されてきたかをみてもいい方法だろう。『旧約聖書』はヘブライ語で、『新約聖書』はギリシャ語で、どちらも当時の庶民が理解できるように書かれていたはずだ。ローマ時代にラテン語に訳されたが、これも当時の信者が理解できる言葉であったはずだ。中世になると、ラテン語は庶民の言葉ではなくなり、専門の教育を受けた聖職者だけが理解できる言葉になった。そして宗教改革の時代に、ドイツ語、英語など、庶民の言葉で訳されるようになった。

日本では『国富論』にかぎらずたいの古典が、一対一対応型の翻訳のために作られた人工言語ともいえる言葉で訳されてきた。翻訳調は普通の日本語とは違うので、特別な学習をしなければ読めない。中世のヨーロッパで使われていたラテン語のようなものだと思えばいい。宗教改革の際に『聖書』が庶民の言葉で訳されるようになったのと同様に、いまの日本でも、古典をごく普通の言葉でごく普通に訳すことが求められているはずだと思う。

閉塞感が強まっている現状では、基本に戻り、昔に戻るためにさまざまな古典を読んでものがよい方法になりうる。だから読むべきは『国富論』だけではない。古今東西に書かれた多種多様な古典がもっと読まれるようになって不思議ではない。だが、たいの古典が一対一対応型の翻訳調で訳されている現状では、古典など読めたものではないと考えるのも当然であり、健全な感覚だといえるはずである。だからいま、基本に戻り昔に戻って翻訳をやりなおすべきなのだ。すでに長谷川宏訳のヘーゲルなど、そのような新訳が登場してきている。この流れをもっともっと大きくしていくべきだと思う。

それはともかく『国富論』に関していうなら、現在入手できる翻訳では時代の要請に合わないことがはっきりしているように思う。これだけの名著にまともな翻訳がないのは不幸なことだ。だれも取り組まないのであれば、『国富論』を訳してみようと、大それたことを考えている。

『国富論』第一編の評価版が完成

『国富論』の新訳は全体の約30%、第一編の終わりまで進んでいます。このまま翻訳を進めて出版する価値があるかどうかを判断し、改定すべき点を教えていただくために100部限定の評価版を作成しました。入手を希望される方は以下の要領で申し込みください。

申し込み先 電子メールで以下の山岡まで
GFC01200@nifty.ne.jp

送付先として以下をかならずお書きください。

- ・ 郵便番号
- ・ 住所
- ・ 氏名
- ・ 電話番号

コメントをお願いするためのものですから、本体・送料とも無料です。

部数に余裕がないため、申し込み者1人につき1冊とし、先着順とします。

みんな英語ができない

翻訳で食べるようになってから 25 年。最初は自分でやり、次に人のものを直し、今は人に教えることが多くなっている。

プロでもなかなか満足のいく翻訳は得られない。ブランド大学を出て、社会経験豊富な翻訳志望者でも訳文以前の誤りが多い。語学職志望の大学生の英語力はお粗末なかぎりだ。英文を精確に読める人間がほとんどいないのは、中途半端な理解で良しとする旧来の英文読解教育にあるのではないだろうか。

英文和訳の段階では英文を読めたことにはならない。自然な日本語、意味の通る日本語にできて初めて英文が正しく読めたと言える。

前回示した『武器よさらば』の「ある解説書の訳」は、予備校業界で英語のドンといわれた伊藤和夫（故人。元・駿台予備学校専任講師）によるもの。私も浪人時代、この先生に教わり英語はこう読むのかと、感銘を受けたことがある。その著書『英文解釈教室』（研究社）は繰り返し読んだが、今なお新鮮な刺激を与えてくれる。伊藤は日本語として読める訳文の重要性をよく認識しており、「『これはその中に彼が住んでいるところの家です』に類するような悪文が、翻訳だけでなく評論文などにも見られることの最大の責任は英語教師にあるのではなからうか」とも述べている。

だがその伊藤にしてから、語義選択の甘い、論理的におかしい、訳文を書いているのは前回「ある解説書の訳」で見たとおり。

『衣服哲学』の訳者・石田憲次は、戦前の高名な英文学者（京都帝国大学英文科教授。日本英文学会会長）だが、訳文は失礼ながらお粗末。これを「学者らしく真面目な、原文に即した翻訳なのだ」という人がいるかもしれない。だがそうでない。前回のわずかな検証部分だけでも、誤記が 1 箇所（これはご愛嬌）、日本語表記の不適切が 1 箇所（これは時代性に帰せられるかもしれない）、語義の吟味の甘さが 3 箇所、語法理解の不正確さが 2 箇所ある。好み云々で済まされてしまいがちな、訳す上での方法論を除いての問題箇所なのだ。

石田の経歴をインターネットで調べていたら、どなたか（市井人）の読書日記にヒットし「何か書いてあることがよくわからないが、ときどき面白い（岩波文庫・衣服哲学・石田憲次訳）」との評があった。これ

こそ、「いわゆる直訳」を的確に言い当てた言葉だろう。「何が書いてあるかわからない」のは訳文が悪いからだ。それでも「ときどき面白い」のは原文に力があるからだ。だから文体はいじらずとも、前の 7 箇所を直すだけで、「何が書いてあるかわかる」訳文になるだろう。「本当の直訳」とは、「文はギクシャクしていても、何が書いてあるかわかる」ものであり、「それを読んで多少もどかしくとも内容がわかるもの、原文の構造を生かす以上当然出るにせよ日本語としての不自然さは最低限のもの」でなければならないはずだ。

伊藤や石田（というより二人に代表される今までのほとんどの英語教育者）は、文法的にも語義的にも論理的にも検討されねばならぬ箇所を、厳密に検証することなく、前後一、二行のなかでの整合性のみあえばよいという姿勢でやっているから、かかるボロが散見されてしまうのだろう。彼らの翻訳文が往々にして、原文から日本文に移る過程に派生する悪しき中間生成言語とでもいうべき様相を呈しているゆえんだ。このような教員に教わった生徒が正しい日本語での訳文を書けるはずがない。

増刷出来！ 変化に惑わされない「真理」

翻訳とは何か - 職業としての翻訳
山岡洋一著 四六判・290 頁 本体 1,600 円

甦る名著 - 絶妙に英訳された 15 万用例

NEW 斎藤和英大辞典普及版
斎藤秀三郎著 A5 判・1,800 頁 本体 6,800 円
ご要望にお応えし、お求めやすい「普及版」を発売

TranRadar 電子辞書 SHOP
<http://www.nichigai.co.jp/translator/>
定番電子辞書をお手ごろ価格でご提供しています

日外アソシエーツ

<http://www.nichigai.co.jp/>
〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8
03-3763-5241

それでもこの二人は、それなりの実績は積み、少なくともウソを教えてはいないのだから、まだ罪が軽い。普通の日本人が一生で一番英語を真剣に勉強する時期に、彼らを教える英語教師の実力が落ちていたとしたらゆゆしきことであろうが、まさに今そうになっている。

最近、出版された英語指導書 2 冊に、これをそのまま信じたら受験に落ちてしまう、というような怪しい箇所を幾つも発見した。

人の欠点をあげつらうのは好みでないが、翻訳学習に格好の誤読材料であること、そと誤りを本人宛指摘してあげたのになしのつづて、誤りが訂正されず受験生・翻訳志望者が間違っただま覚え、あとで泣きを見ないで済むよう、実名をあげる。

澤井繁雄著『英文読解完全マニュアル』

まず、これでよく英語を教えられるな（著者紹介文によれば、京都駿台予備校実力講師）、とつくづく感心するトンデモ本『英文読解完全マニュアル』（澤井繁雄著・ちくま新書）のほんのさわりを一つだけ上げる（この本については、TranNet 通信の連載「翻訳道場」でこまかくとりあげたので）。

著者訳文は澤井のもの。私の意見の<私>は柴田。直訳は文構造に従って後ろから訳し上げている。意識は商品として通用する翻訳の一例。

On those occasion one cannot but contemplate the many things that have been done that ought not to have been done, and the many things that have not been done that ought to have been done.

著者訳文

そうした場合には、当然するべきはずであった事柄で、しなくてもよかったはずの多くの事柄を、また、しなくてもよかった事柄で、当然すべきだった多くの事柄をじっくり考えないわけにいかない。

私の意見

二重限定は、前の関係代名詞の内容を後の関係代名詞の内容がさらに制限します。したがって後の関係代名詞の内容に力点が置かれます。著者訳文は、このポイントは押さえられているようですが、have been done と have not been done が勘違いして訳されているように思います。

直訳

そうした場合には、人はなされるべきでなかったところのなされてしまった多くの事、そしてなされるべきであったところのなされずにおかれた多くの事を熟考せざるをえない。

意識

そうした場合には、多くのやってしまったがやるべきでなかった事、また多くのやらなかったがやるべきであった事を、人は考えずにはおれない。

葉袋善郎著『英文精読講義』

次に、予備校界での人気ナンバーワンとの呼び声高い、葉袋善郎著『英文精読講義』（研究社）。

こんなレターを書いた。

疑問点は、葉袋(註解者としている)の説明で私(柴田)が疑問に思った部分。お伺いは、私の見解。

著者あてのレター

葉袋善郎様。タイトルに惹かれ購入し、寝転がって眺めていたところ、Lesson8 に（そこしかまだ見ておりませんが）いくつか気になる箇所があり、お節介ながらお知らせ申し上げます。「精読」の名に恥じぬ本に改良されてゆかれることを期待しております。

柴田耕太郎

Lesson 8 言語能力 (原文)

It has been almost twenty years since I left Japan, in my early youth, and ceased using Japanese, let alone writing it. I am, therefore, not a student of Japan but one who was, through the accident of birth, raised and educated in both the Japanese and Western systems, so I cannot take credit for my competency or otherwise in either the English or the Japanese language. When I returned to Japan, I increasingly realized a duality in my personality: when speaking Japanese, I was in fact in a Japanese conceptual framework; when speaking English, I reverted to my Western persona.

疑問点

註解者訳文(P82)「私は、若い頃に日本を離れ、日本語を書くことはいうまでもなく、話すこともしなくなってからほぼ 20 年になる」

註解者解説(P83)「using Japanese (= 日本語を使う)には能動的なニュアンスが感じられます。したがって、ここは『読み、話す』のうち能動的な動作(= 発信動作)である『話す』を using で表わしたと考えるのが妥当です。すなわち、using = speaking と考えるべきです」

お伺い

「using Japanese が能動的な動作で、読む・話すのうち話すほう」ととるのは強引でないでしょうか。use は「ある目的のために用いる」ことであり、文脈により解釈せねばなりません。「読む」ととれる例：Yet many days or months will go by without my using books.(本を使うことなく月日が過ぎる 本を読まないまま日々は過ぎてゆく)。このあと引き合いに出される日本研究者(student)であれば読むことは必須なはずですから、ここは「読む、話す」の両方ととるべきでしょう。註解者御自身も次の解説で、話すこと以外(読むこと)の可能性を無意識に示しています。

註解者解説(P84)「(私は英語の他に日本語をかなり使えるので、一見すると、日本を研究している者に見えるかもしれませんが。しかし、日本を研究している者なら、当然、日本に滞在していたり、あるいはしょっちゅう日本に行ったりして、日本語を<日常的に使っている>はずです。ところが)私は、若い頃に日本を離れ、日本語を書くことはいうまでもなく、<話したりする>こともしなくなってからほぼ 20 年になります。(以下略)」

疑問点

註解者解説(P84)「なお、前文の『私が日本語から離れて 20 年近くになる』は、『私が日本を研究している者ではない』ことを説明するために置かれたのです。決して『私が日本と西洋の両方の制度の下で育てられ、教育を受けた者である』ことを説明するためではありません。したがって、therefore は I am not a student of Japan にだけかかっています。but ... system には therefore は及んでいないと考えるべきです」

お伺い

これは典型的な not ... but ~ の文だと思えます (... でなくて~)。「私が日本から離れて 20 年近くになり、その間日本語も使っていないということからわかるように」/「私は日本研究者などではなく、日本と西洋の両方の制度の下で育てられ、教育を受けた者というにすぎない」当然 therefore は but 以下にもかかると思えます。

疑問点

註解者解説(P89)「筆者は Western persona(西洋人の仮面)という言葉を使っています。これから推察すると、筆者は自分の人格的な基盤は日本人のほうにあると考えているようです」

お伺い

persona はここでは「外的人格」という意味でないでしょうか(一応、哲学辞典にあたりました)。「自分の人格(personality)の二重性に気がついた」というところで以下詳細を示す:(コロン)が置かれ、そのあと二つの when が同格で;(セミコロン)により比較・対象される例が示されています(a Japanese conceptual framework と my Western persona)。つまり persona は framework の言い換え、ともに personality と等価ではないでしょうか。

(卑近な例では 1/18 毎日新聞夕刊芸能欄で、井上陽水のコンサート評にこうありました(「サングラスは)仮面という機能を超えて、彼のペルソナになっている」)

*ここからは小さなことですがついでに...

疑問点

註解者解説(P82)「『... , let alone ~』は否定文脈で使い、『~はいうまでもなく...も』という意味を表わします」

お伺い

肯定文脈には使われないものと誤解されてしまいましたか。

肯定文での例：He can speak German, let alone English.(= still more)

否定文での例：He can't speak English, let alone German.(= still less)

疑問点

註解者解説(P85)「『either A or B』は『A か B かどちらか一方』という意味です。ところが、前に not を置いて『not ... either A or B』となると『A か B かどちらか一方が...ない』という意味になることは稀で、『A も B もどちらも...ない』という全部否定の意味になるのが普通です」

お伺い

「全部否定の意味になるのが普通」ではなく「なるに決まっている」のではないのでしょうか。not ... either A or B = neither A nor B、と言いかえられると思いますが。「どちらか一方が...ない」の意味では、この形は使えず他のいいかたになるでしょう。

疑問点

註解者解説(P85)「my competency or otherwise は『私の言語能力、というよりむしろ言語無能力』という意味

で、(以下略)」

お伺い

or は言い換えとも、選択・譲歩ともとれそうですが。言い換えなら、「即ち」「もっというと」「いいかえれば」、選択・譲歩なら「または」「というか」「...だろうと~だろうと」と曖昧なところがあるのではないのでしょうか。日本語にする場合、日本語の流れにあった訳語が難しそうですね。ここは広い意味をまず出し、徐々に狭めてゆくと分かりやすいと思いますが。「私の言語能力あるいはその反対のもの」「私の言語能力というか非言語能力というか」「優れているのかどうかは分かりませんが、自分の言語能力を」などとしては如何でしょうか。

- - それにしてもこの原文、論理展開が甘い気がします。精読材料としてはふさわしくないのではないで

しょうか。

このふたつの本の疑問点を、それぞれの出版元の担当編集者経由で著者に送ったが、どちらからも返事は来ない。それでも『英文精読講義』のほうは編集の佐藤陽二から、すぐに返信があり、自分ごときには難しい深遠な議論であること、著者には確かに渡したが現在多忙を極めていること、が書かれてあった。すぐ返信する、自分の判断は避ける、質問者も著者も傷つけない、三点に留意しているのはまさに編集者の鏡。私がかって在籍した老舗出版社で、ベテラン編集者から聞かされたまさに編集心得そのものである。ほっかむりしたままの『英文読解完全マニュアル』の編集担当、湯原法史、増田健史は大いに恥じ入って欲しい。

アイディ『英文教室』受講生募集のお知らせ

柴田耕太郎

英文を精確に読み解く語学力と論理力があれば、翻訳は自ずと出来るものと私は確信しています。

学校教育の欠陥からか、この二つを備えた翻訳志望者はせいぜい20人に1人(アルク翻訳大賞の審査経験から)。私が主宰するこの教室では徹底した精読訓練を通じ、「一点の曇りなく読み解く」技術の習得を目指します。

翻訳家志望者、翻訳書編集者、語学教員、その他卓

抜な英文読解力をつけたい社会人の入門を期待します。

9月より定数集まり次第、開講。精読エッセイ100題、出版翻訳25題、読み解きポイント50など、各種講座あり。

なお希望者があれば「本当の声に出して読みたい日本語」講座も開きます(実は私の専門は演出論で、現在某大学で「シナリオ論」を教えています)

興味ある方は下記にお問い合わせ下さい。

株式会社アイディ
柴田耕太郎 主宰 『英文教室』
事務担当 前川
TEL: 03-3357-1189
FAX: 03-3357-4489
Email: educa@id-corp.co.jp
〒162-0054
新宿区河田町 7-6、ID河田町ビル

エリザベス・ジョージ

『ビバリーヒルズ高校白書』『ER』など長寿の海外ドラマはたくさんあります。見てみると、回数を重ねる上で仕方がないのかもしれませんが、面白いほど登場人物の関係がだんだん複雑になっていくことが多いようです。たとえば女性Aが男性Bとつきあっていて、別れたあと男性Cとつきあい、一方のBは女性Dとつきあいかけたが結局女性Eとつきあい、EはCと交際していた過去を持ち、しかもこの5人全員が友達である……。そこにさらに登場人物それぞれの家庭環境やら、かなりつらい過去やらが絡んできて、非常にドロドロした人間関係になっているのに、ドラマ自体は妙にさわやかで、登場人物たちもジョーク交じりに明るく友達づきあいを続けていく……。

日本のドラマでも世間が狭いというか、二重三重にこみいった関係になっているものもありますが、海外ドラマ(主にアメリカのものですね)の方が、「あっけらかん度」が強い気がします。お国柄なのかな、と思っていたのですが、ふと、エリザベス・ジョージのリンリー・シリーズにも当てはまることだと思い至りました。

エリザベス・ジョージはオハイオ州出身の女性作家で、アメリカ人ですが、イギリスを舞台にした本格ミステリを書いています。

同じように外国人でありながらイギリスを舞台に書いたミステリ作家はたくさんいて、たとえば大御所ジョン・ディクスン・カーはアメリカ出身(のちにイギリスに帰化しました)ですし、黄金期のイギリス四大女流作家の一人ナイオ・マーシュはニュージーランド人です。また現代でもポーラ・ゴズリングやマーサ・グライムズなどたくさん名前が挙げられます。

マーサ・グライムズのように、本物のイギリス人の読者から「こんなのはイギリスじゃない!」という批判を受けてしまう作家も多いのですが、それでもミステリの総本山イギリスという舞台は各国のミステリ作家にとって魅力的なようです。

そしてこれは私見ですが、イギリス人に評判が良からうと悪からうと、「非イギリス人」が書いたミステリにはイギリス好きで「非イギリス人」の読者にとってたまらない魅力があると思います。なぜなら当のイギ

リス人たちは自分たちの国の何が外国人を惹きつけるのか今ひとつわかっていないからです! 非イギリス人作家の方がそのへんのサービス精神が旺盛なのか、イギリスらしさのエッセンスというか、魅力のぎゅっと詰まったところを書きたいと思うあまり、リアリティのないほど過度に「イギリス的」な世界を作り上げてしまうのだと思います。それは外国人が日本をいまだにゲイシャ・ガールの国だと誤解しているのと同じことなのかもしれませんが、イギリスに憧れる外国人にとっては大きな魅力なのです。

エリザベス・ジョージはそんな「非イギリス人」作家の中では、イギリス人に評判の良い作家です。主人公であるロンドン警視庁の警部トマス・リンリーが第8代アシャートン伯(つまり伯爵なのです!)で、イートン校出身の青い目の美男子で、ロンドンのベルグレイヴィア(いかにもという高級住宅街です)の執事付きの屋敷で暮らしていたりと、イギリス人作家なら絶対しないような設定はご愛嬌ですが、緻密な調査に基づく重厚な作風はP・D・ジェイムズやルース・レンデルと比較され、ドロシー・セイヤーズ(以上三人ともイギリス人)の後継者とまで言われています。

リンリー・シリーズのレギュラー・メンバーは5人います。まず先ほどご紹介したリンリー警部。それからリンリーのイートン校時代からの友人で鑑識の専門家サイモン・オールコート=セント・ジェイムズとその使用人の娘で写真家のデボラ・コッター。リンリーと同じく貴族の血を引き、セント・ジェイムズの助手でもあるレディ・ヘレン。そしてもう一人、リンリーの部下で他の4人とは全く違う労働者階級出身の女性刑事バーバラ・ハヴァース。

ざっと説明しただけでもかなり密な人間関係を感じさせるのですが、さらにバーバラ以外のいわゆる上流階級チーム(デボラは使用人の娘なので平民ですが、セント・ジェイムズの家で生まれ育ったので上流社会の生活に慣れています)の4人には、錯綜した人間関係が展開していくのです。

まずセント・ジェイムズとデボラは同じ家で育ち、互いに愛情と深い絆を感じています。ところがリンリーが運転していた車が事故を起こし、同乗していた

セント・ジェームズが負傷し、脚に一生残る重大な障害を負ってしまいます。脚が不自由になったセント・ジェームズは（年齢が離れていたこともあり）、デボラに気後れし、遠ざかり始めます。悩んだデボラは写真の勉強のためにアメリカに渡り、アメリカまで訪ねて来たリンリーと交際を始め、ついには婚約してしまったのでした。一方、リンリーとも長年の友人であるレディ・ヘレンはセント・ジェームズに想いを寄せたものの拒絶され、その後さまざまな男性との不安定な短い関係を渡り歩いています……。

以上が時系列的に一番最初になる作品（発表順では第4作）『ふさわしき復讐』（嵯峨静江訳・ハヤカワミステリ文庫）が始まる時点での4人の関係です。ここまででもすでに頭が痛くなるほどの泥沼な人間関係ですが（普通、この状況では今後友情も愛情も成立しなくなってしまうでしょう）、ここからこの4人はシリーズが進むごとにさらにもつれていくのです。

これからこのシリーズをお読みになる方の興味をそいでしまわない程度にお話すると、まずデボラとセント・ジェームズが長年の行き違いを乗り越えてお互いの愛情を確認しあいます（つまりリンリーはふられる）。ふられたリンリーはデボラを忘れることができず苦しみますが、レディ・ヘレンに慰められ、痛手を乗り越え、レディ・ヘレンとの未来を考えるようになるのです。

こんなドロドロな状況なのに、なぜかこの4人は今まで築いてきた信頼関係を失いません。男性同士、女性同士は友情を失いませんし、かつて愛し合った男女も互いに対する優しさを失いません。過去は時に重くのかかかってきますが、誰かを憎んでいる人が一人もいないのです。事件の現場で出くわすだけではなく、プライベートでもよく会うわけですが、ぎこちなくなることはあるものの、全体にいつも明るくジョークを言い合い、関係自体が壊れてしまうことはないのです。

そして毎回ラストでは、先への希望を暗示して終わるので読後感は悪くないのです。

私はジョージのミステリをひと言で表わすと「容赦をしない」ということだと思います。「徹底的」でも良いでしょう。1988年の第1作『そしてボビーは死んだ』（小菅正夫訳・新潮文庫 / 『大いなる救い』吉澤康子訳・ハヤカワミステリ文庫）以来、今年7月に発表された第12作 A Place of Hiding にいたるまで、その作品の長さはどんどん長くなっています。それはジョージの完璧主義というか、容赦のなさがさらに進んでいるからだだと思います。

ジョージが突きつけてくるストーリーはいつもかなり苛烈です。事件の発生と共に提示される関係者の状況はかなり極限状態で、リンリーがたどりつく真相はさらに過酷です。登場する人物の一人一人が、たとえば目撃者のような端役まで、はっきりとしたキャラクター設定をされ、内心まで丹念に書き込まれています。そしてその人物たちはみな往々にして何かが過剰である場合が多いのです。それは愛情であったり、正義感であったり、何かの信念であったり、本来人間を不幸にするものではなく、むしろ正しい方向へ導くはずのものが、それにあまりにこだわりすぎたために、たとえばようもなく大きな悲劇を生んでしまうのです。

メインとなるストーリーのほかには必ずいくつかの脇筋があるのですが、ジョージは絶対にどれかをおろそかにしたり、忘れてしまうことがありません。ラストまでにすべての筋に何らかの結末を与え、それを読者に提示してくれるので、消化不良な感じが残りません。また、非常に陰鬱な悲劇を描いていても、結末では必ず何らかの光が見えるように書いています。だから読者は最後のページで「ふーっ」と肩で息をつくことができるのです。

「容赦しない」というのは出てくる人物の性格だけでなく、残酷なほどの描写のことであります。最初から最後までその筆力で押しまくるパワーには圧倒されるのひと言につきます。

英米では新作が出るごとに必ずベスト・セラー・リストにのる人気ぶりなのですが、第8作の『消された子供』（天野淑子訳・ハヤカワミステリ文庫）以降邦訳が出ていないのは残念なことです。リンリーらシリーズ・キャラクターたちの動向もその後の4作で大きく動いていますから、翻訳が待たれます。

私事で恐縮ですが、私は初めてジョージのミステリを読んだとき、頭を殴られたような衝撃を受けました。たしか『ふさわしき復讐』だったと思います。いったいこのパワフルさは何なんだろう……。とにもかくにも圧倒された私は、まずその当時邦訳が出ていた作品を立て続けに読みました。どの作品もどの作品も強烈で、目をそむけたくなるほどの悲劇に満ちていました。読みながら私はどうして自分がこんなにつらい話ばかりを読んでいるのか不思議でした。これでもかこれでもかと迫ってくる逃げ道のない運命を、どうしてこんなに夢中になって読んでいるのだろうか。しかも読んでいる間は休むことができず、長い作品ばかりなので本当に困りました。これは麻薬だ 本当にそう思いました。

でもそのうちに私は一つの答えに思い至りました。ジョージが描く世界はあまりに陰惨です。読んでいて苦しくなるほどに……。おそらく私はその苦しさを早く解消したくて、ジョージが与えてくれるなんらかの結末を読んで終わりにしたくて、むさぼるように先を急いで読んでいたのです。脇筋をふくめて自分が提示したものには必ずきっちりと責任を取るジョージですから、肩すかしを食うことは絶対にありません。それがどんなに過酷な結末であっても、真正面からドーンとぶつかって結果を出してくれるというのはすっきりするものです。それがジョージ的カタルシスの魅力なのでしょう。

総論はこれくらいにしていくつか個々の作品を紹介しましょう。まずはアンソニー賞など各賞を受賞したデビュー作『そしてボビーは死んだ』です。ヨーク地方のある農場で農場主の首を切断された死体が発見されます。死体の脇には被害者の娘が放心状態で坐っていて、「私が、やった」と呟いていました。この娘が犯人とは思えない地元の警察は、ロンドン警視庁に応援を頼みます。そこで派遣されるのがリンリー警部と、新しくチームと組んだ女性刑事バーバラ・ハヴァースです。バーバラは三十代の独身女性で、男社会のロンドン警視庁で周囲とぶつかってばかりいましたが、とうとう最悪の上司、貴族出のにやけたプレイボーイ（と、バーバラは思っている）リンリーと組まされて絶望し、ことあるごとにリンリーに反発します。

事件の方は自分の農場から出ることさえほとんどなかった、非常に信心深い被害者の家庭の秘密がしだいにあきらかになっていきます。十代で結婚し、二十代で二人の娘をおいて出て行った妻。謎の失踪をした長女。そして病的なほど太り、口をきけなくなっている次女。被害者の家から消えた女性たちを探し当て、錯乱している次女に長女を対面させた時、真相はあきらかになるのですが、その真相はあまりにも忌まわしく、衝撃的なものでした……。

リンリーをとりかこむ上流社会の華やかで洗練された生活と、不器用で怒りっぽく、庶民そのもののバーバラの生活がとても対照的です。バーバラがリンリーに反感を持ち、リンリーがそれにとまどう様子もよく描かれています。そして事件の異常さが見えてくると平行して、デボラへの未練を断ち切れないリンリーの苦悩と、バーバラの家族をめぐるあまりに痛ましい過去もうかがいあがってきます。そして結末でリンリーが見せた意外なほどの包容力が全編を救っているとだけ申し上げておきましょう。

第5作『エレナのために』はいろいろな意味でジョージらしい作品といえます。ケンブリッジ大学の娘エレナがある日惨殺体となって発見されるところから事件は始まります。リンリーとバーバラが捜査をすすめていくと、聴覚の障害を持ちながらも、成績優秀な上に美しいエレナは多くの男性に人気があったことがわかります。エレナと交際のあった男性教官に容疑がかかりますが、そこで別の女子学生が殺されて……。

作品全体を通じて被害者エレナの存在感が他のすべてを圧倒しています。若く美しく積極的で強靭で、驚くほどに利己的で、その存在ゆえに周囲の人々が壊れていくのです。『エレナのために』（原題は For the Shake of Elena）という題名そのままに、殺人事件も含めた全体がエレナへの人々の執着、そしてエレナの自分自身への執着が起こした避けられない悲劇なのです。

次に未訳作品ですが、第9作 Deception On His Mind は、エセックスのパキスタン人の移民社会の中で起きた殺人を描いたミステリですが、独特の慣習や、イギリス人住民との衝突などが綿密な取材の上で細かく書き込まれています。殺人の動機も方法も、パキスタン人社会でしかありえないものです。そしてもちろん「ジョージ的」な強烈な個性とパワーを持った人物が次々と登場します。閉ざされた家庭内で展開される犯人の狂った論理というのは、東洋的であると同時に、ジョージのお家芸であるところを改めて実感する1冊です。

リンリーはレディ・ヘレンとの長年の愛を実らせて新婚旅行中なので、この作品ではバーバラが独力で捜査をします。バーバラに時ならぬ恋の予感が訪れるところも見逃せません。

次は In Pursuit Of the Proper Sinner。こちらはダービシャーの片田舎のストーン・サークルで若い男女の虐殺死体が見つかることから事件は始まります。被害者のうち女性の方はニコラという娘なのですが、その父親アンディ・メイデンは若き日のリンリーの上司でした。アンディに呼ばれ、捜査を始めたリンリーの前に、ニコラの意外な素顔が浮かび上がってきます。ロンドンでロー・スクールに通っているはずが、友人とチー

ムを組んで売春をし、それを恥じる様子もない女性でした。ニコラではなく一緒に死んでいた男性テリーの線を追っていたバーバラはやがて亡くなった作曲家の自筆の楽譜に行き当たり……。

かつての上司にこだわるリンリーとそれに反発するバーバラ。アンディの下にいた頃、おとり捜査に失敗した苦い記憶がリンリーをよけいかたくなにします。そして最後に真相はあきらかになり、もう一つの悲劇が起こるのをリンリーは止められませんでした。

この作品でも奔放で強靱な女性、ニコラが印象的です。先ほどご紹介した『エレナのために』のエレナに近い人物ですが、エレナよりもさらに功利的です。エレナにはそういう性格に育つ必然性のようなものが感じられますが、ニコラの場合、ごく普通に育ってきた女性なので、その分さらに空恐ろしく感じられます。

バーバラとの和解と苦い結末を通して、自身を反省するリンリーの姿が胸に残ります。

第11作 A Traitor to Memory では、リンリーの妻ヘレンが懐妊します。大喜びする一方でリンリーは、つわりで気分が変わりがちなヘレンに戸惑い、流産を繰り返しているデボラにこのことをどう告げようかと悩みます。

事件の方はひき逃げ事件です。被害者ユージーンは20年前の少女殺害事件の被害者ソニアの母親でした。リンリーは今回のひき逃げにも20年前の事件が関連しているとみまます。

ダウン症のソニアは子守の女性に殺害されたとして事件は片付いていました。ユージーンは事件後離婚しています。ソニアの兄ギデオンは父親リチャードの許に残り、子供の頃から天才バイオリニストとして活躍していましたが、最近コンサート中に突然弾けなくなり、その後全く演奏できなくなっていました。リチャードはギデオンが幼い頃から息子の音楽の才能にすべてを賭けていたのです。

捜査を進めるうちにユージーンがリンリーの上司で、この事件をリンリーに任せたウェヴァリーとかつて交際していたことがわかります。ウェヴァリーは、自分の名誉を守ってくれるだろうと期待してリンリーを指名したのでした。

複数の被害者が錯綜する中、今度はウェヴァリーがひき逃げされてしまいます。やがてリンリーとバーバラがたどりついた真実はまたもや痛ましいものでした……。

相変わらず力強いエネルギーを感じる作品ですが、初期よりも円熟していて、全体の構成が整っている気

がします。しかし数多くの登場人物がそれぞれの過去やそれぞれの意志（それもかなり強い意志）を持ち、錯綜した人間関係を作っている状況を容赦なく描き出して行く筆致は健在です。異常なほどの信念と恐ろしいほどの冷酷さをあわせもつリチャードがこの作品で最も「ジョージ的」な人物かもしれません。

ジョージの最新刊は今年の7月に発表された A Place of Hiding です。こちらでは久々にセント・ジェイムズとデボラが活躍します。舞台はイギリス海峡の孤島です。シリーズ・キャラクターたちの今後にも目が離せません。

エリザベス・ジョージの作品リストを[翻訳通信のサイト](http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/my/dt/eg.html)に掲載しました。URL は以下の通りです。

<http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/my/dt/eg.html>

ROUTE 66 A.D.

海外ツアーは
ローマ時代に
始まった!

人類史上初のツアー旅行体験記

トニー・ペロテット 仁木めぐみ(訳)

2000年前のロードマップを手に
当時の観光ルートを巡る異色の歴史紀行。
ローマからギリシア、トルコ、エジプトへ。
道中で出会う、娼婦、泥棒、見世物小屋……
人の好奇心は昔も今も変わらない。

歩いた地中海

2000年の時空を超えた好奇心いっぱいの旅 ●2,600円＋税
4-334-96157-6

光文社 〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
<http://www.kobunsha.com>